

## ギリズ『古代ギリシアの歴史』におけるクレオンの描き方

堀 井 健 一

Cleon in J. Gillies' *The History of Ancient Greece*

Ken-ichi HORII

## はじめに

ジョン＝ギリズ (1747－1836年) は全8巻の『古代ギリシアの歴史』(*The History of Ancient Greece, its Colonies, and Conquests*) を著した。最初は1786年にロンドンで2巻本として刊行されたが、その後8巻本になった<sup>(1)</sup>。この著作は、かつて人気があったし、読み物的であるが幾分仰々しい文体で書かれたと評されている<sup>(2)</sup>。

本稿は、近代西洋人が古代アテネの民主制をどのように理解してきたかを探る研究の一部としてギリズの『古代ギリシアの歴史』を題材として取り上げ、手始めに彼が古代アテネの民主制時代の政治家クレオンをどのように描いたかを追求する試みである。

西洋近代人が古代アテネ民主制をどのように理解してきたかを探る研究にはロバーツの近著で古代ギリシアの時代から現代まで通史の形で論じた先行研究があるが、ギリズの著作に関する彼女の言及は1ページにも満たない<sup>(3)</sup>。ロバーツはギリズの著作について、古代アテネ民主制が野蛮で気まぐれ、獰猛でみだら、民衆による貴族に対する僭主制の性質を有することを彼が繰り返し述べ、自国イギリスの世襲の王たちによる統治の優位をジョージ3世に説くことを狙っていると概説する<sup>(4)</sup>。ギリズの著作に関するロバーツの言及は短いものであるので、彼のクレオン観についてはまったく言及がない。

古代ギリシアの政治家クレオンは、これまでしばしば民主制期アテネのデマゴグの一人と評されてきた。クレオンは、彼と同時代の代表的政治家のペリクレスやニキアスが貴族の出であったのに対して、非上層民出身でありながらペリクレスやニキアスらを公然と非難したりして彼らに対抗しようとし、時にはニキアスに代わって将軍として軍事遠征に出かけるなどした。彼のそのような無鉄砲さと民衆寄りの指導者として振る舞っては上層市民を苦しめた行動は、同時代の喜劇詩人アリストファネスによってしばしば喜劇作品中の嘲笑的にされた。さらにはスパルタの常勝将軍ブラシダスと張り合い、ついにはアンフィポリスの戦いで彼の軍によって敗北し戦死した。クレオンのデマゴグぶりは、周知のとおり、従来、アテネ民主制の欠点として近代西洋人たちによってしばしば指摘されてきた。近代西洋人たちが古代アテネの民主制をどのように理解してきたかを探る際、しばしばデマゴグとして評されてきたクレオンの人物像が近代西洋人によってどのように形成されてきたかを把握する必要がある。近代人によって描かれたクレオンの人物像の形成過程を把握することによって彼の実像と描写された人物像との違いが明らかになる可能性があるし、そしてもしかかる違いが明らかになれば、彼の人物像と関連性のあるアテネ民主制観も改めて検討し直す必要が生じてくる可能性がある。このような問題意識を持ちながら、ギリズがかかるクレオンをどのように彼の『古代ギリシアの歴史』の中で描

いたかを探る試みは、有益ではなかろうか。

以上の点を考察するために、本稿では先ず初めにギリズの生涯について簡単に紹介し、次に彼がクレオンをどのように描いたかを具体的に彼の記述に沿って明らかにする。

## 第1章 ギリズの生涯

ギリズの生涯について以下では *Dictionary of National Biography* に従って述べる。彼は、1747年にフォーファーシャーのブレチンで生れ、グラスゴー大学では病気のギリシア語教授に代わりギリシア語を教えた経験がある。大学時代に「古典文学研究の擁護」を執筆し、それが定期刊行物らしいものに印刷された。その後、ロンドンで文学研究に努めるなどした後、1784年に法学博士の学位を得た。1793年にスコットランドの王室歴史編纂官に任命された。それ以前の1786年に『古代ギリシアの歴史』2巻を刊行し、その書は以後、巻数が増して版を重ねただけでなく、フランス語訳やドイツ語訳も刊行された。他に、アレクサンドロス大王からアウグストゥスまでの『世界史』2巻(1807年)と、訳書として『リュシアスとイソクラテスの弁論』(1778年)、『アリストテレスの倫理学および政治学』(1797年)、『アリストテレスの弁論術』(1823年)がある<sup>(5)</sup>。

ギリズの『古代ギリシアの歴史』には同時代の書としてウィリアム・ミトフォードの『ギリシア史』(*The History of Greece*)全10巻があるが、後者は1784年に第1巻が刊行されたにもかかわらず1810年まで完結しなかった<sup>(6)</sup>、このギリズの著作は、ミトフォードのものほどではないかもしれないが、読まれたと思われる。

## 第2章 ギリズ『古代ギリシアの歴史』におけるクレオンの描き方

### 第1節 ミュティレネ人処遇時のクレオン

レスボス島のミュティレネ人の処遇問題はペロポネソス戦争の最中の前427年7月の出来事であった。歴史家トゥキュディデスの『歴史』(Thucydides, *Historiai* [以下Thuc.と略す])の第3巻36-49章の中で詳述されている。前年の6月に元はアテネ陣営であったミュティレネを含むレスボス島の諸ポリスがアテネから離反したが、アテネはその鎮圧のために軍を派遣し、前427年6月にミュティレネを降伏させた<sup>(7)</sup>。その直後にミュティレネ人をどのように処罰するかがアテネの民会で審議され、いったんはミュティレネ人男性市民の全員の処刑と婦女子の奴隷化が決議されたが、翌日になって再び民会が開催され再審議された上、前日の決議を覆してミュティレネ人の命を救うことになった。

このミュティレネ人処遇問題の一件は、アテネ民衆が民会で前日の決議とはまったく正反対の決議を行なったことから、アテネ民衆の気まぐれさを示唆する例としてしばしば歴史家たちによって指摘されてきた。この結果的に2日続いた民会でクレオンは一貫して他の同盟諸国に対する見せしめとしてミュティレネ人男性市民の処刑をアテネ民衆に要請した。2日目の審議の中でディオドトスがクレオンの意見に反対する意見を説いて前日の決定を覆し、その結果、ミュティレネ人は命を救われた。この一件は、クレオンの無慈悲さ

を示唆する例としてもしばしば歴史家たちによって指摘されてきた。

ギリズは、ミュティレネ人処遇問題の時のクレオンをどのように描いたか。彼は、その問題を審議したアテネ民会について2日目の話から述べている。そしてギリズ<sup>(8)</sup>は、クレオンがその前日の民会では「ミテュレネ〔ママ〕<sup>(9)</sup>に対する血なまぐさい条令を提案して通過させた」と記しているが、その箇所ではそのクレオンについて「乱暴なデマゴグ」であり「横柄なずうずうしさ」を持つと説明するだけでなく、彼とアテネ民衆との関係について次のような説明を行なっている。すなわち、「騒々しくて猛烈な雄弁さが厚かましい不品行のクレオンを生活の最低の地位からアテネ人の民会の中の高い程度の権威者へと登らせた。大衆は彼の巧みさによってだまされ、彼の厚顔無恥の生意気さを喜んだし、また彼らはその生意気さをごまかしのない大胆さと、そして男らしい率直な性格と呼んだ。彼の態度に大衆は、その態度が自分たち自身のものに似ているのに比例して賛成した。そして彼の不徳の最悪のものが、彼のうわべだけの愛国心のお先棒たちの間で支持者たちを見出した」とである<sup>(10)</sup>。要するにギリズは、クレオンの人となりについて乱暴なデマゴグ、生れの卑しい成り上がり者、横柄で凶々しい、厚顔無恥で生意気、不徳の最悪のものを持つ者であり、アテネ民衆にはかかる彼の性格が大胆で男らしい率直さを持つ者として好意的に映ったと述べる。続いてギリズ<sup>(11)</sup>は、クレオンが前日に自身が提案した「残酷な法案」を支持し通そうとし、デロス同盟の運営に必要な安定さを持ちえない自国民の弱気な勧告をとがめたと述べる。

他方、ミュティレネ人の処遇問題を討論するアテネ民会について記述するトゥキュディデスは、前述のギリズの記述に相当する箇所の中でクレオンが市民の中で最も乱暴であるが民衆派の中で最も説得力のある人物であると述べているが、彼によるクレオンの人物評はただそれだけにすぎない(Thuc., 3.36.6)。従って、前述のギリズのクレオン評はトゥキュディデス史料からはなはだ逸脱していると言わざるをえない。

ところで、トゥキュディデスは2日目の民会について、クレオンの演説とそれに対するディオドトスの反論を伝えるが、彼がディオドトスの反論を引用しようとする際に彼をどのように紹介したかと言えば、彼が前回の民会でミュティレネ人への死刑申し渡しに特に反論したと紹介するに過ぎない(Thuc., 3.41)。それに対して、ギリズは、ディオドトスの反論について言及する際、それに先立って行なわれたクレオンの演説を「血に飢えた演説」と述べるし、他方でディオドトスについては「適切な節度ある心、加えて政治について深い造詣、人間性に対して深い洞察力を生まれながらに持った男」であり、「立派な弁論家」であり、彼が「あえてミテュレネ人〔ママ〕たちの大義を弁護して人間の諸権利を主張した」と紹介する<sup>(12)</sup>。ここでギリズは明らかに、トゥキュディデスによって引用されたディオドトスの演説を読んだ後の印象を添えて記述している。また、ギリズは、人名のディオドトス(Diodotos)をデオダトス(Deodatus)と誤記している<sup>(13)</sup>。

また、ディオドトスの演説が行なわれた後に採決が行なわれ、彼の主張がわずかの差でクレオンの主張より得票を得て、前日のミュティレネ人への死刑申し渡しが破棄された(Thuc., 3.49.1)。これに関してトゥキュディデスは、クレオンの論とディオドトスの論が最も相反したものであったことと採決の結果が僅少差であったことを伝える(Thuc., 3.49.1)。他方、ギリズ<sup>(14)</sup>は、「デオダトス〔ママ〕の節度と良識(それはクレオンの影響であった)が単なるわずかの過半数の表決によって承認された」と述べ、ディオドト

スが節度と良識のある演説を行なったのはクレオンの演説に反応したことに起因するものであることを示唆して、ディオドロスの良識とクレオンの非常識を対比させることを試みているかのごとくである。

## 第2節 スファクテリアの戦いのクレオン

前425年夏のスファクテリアの戦いに至ったのはその直前のピュロスでの戦いとその休戦協定の破棄によるものであったが、アテネとスパルタの休戦協定が破棄されたのは、トゥキュディデスの記述によればクレオンのせいであった(Thuc., 4.21.3, 22.2)。Thuc., 4.21.3の中でトゥキュディデスは、クレオンのことを民衆指導者(démagôgos)でありその時には大衆に対して最も説得力がある(pithanôtatos)人物と表現している。これに関連してギリズ<sup>(15)</sup>は、結果的にアテネとスパルタの休戦協定の破棄に至る両国のアテネでの交渉時について「クレオンの激しさによってそそのかされて、彼ら〔アテネ人たちのこと、引用者注〕は使節たちに大いに傲慢な態度でもって返答した」と解説する。この箇所のギリズによる叙述は、「アテネ人たちの横柄な要求」<sup>(16)</sup>と副題が付いている。そしてアテネ人たちのスパルタ使節に対する要求が結局アテネとスパルタの休戦協定の破棄に至る過程については、トゥキュディデスがThuc., 4.21.3-23.1の中で比較的詳述しているのに対して、ギリズ<sup>(17)</sup>は、Thuc., 4.21.3の中で伝えられているアテネ人側の要求の内容について単に簡潔に述べた後、この件についてはアテネ人側には正義の証左としてスパルタ軍船の返還が期待されたのに様々な口実を理由に彼らがそれを拒否したので、両国の間の関係が再び敵対的となったと述べる。その際、ギリズ<sup>(18)</sup>は、脚注の中でその口実についてトゥキュディデスの一節をそのまま、一部は英訳して一部は原典のギリシア語のままにして、引用して示すとともに、その口実を理由にしてアテネ人たちが軍船の返還に反対したと「トゥキュディデスは、彼のいつもの不偏不党さでもって、語る」と解説する。この箇所でギリズはあたかも、問題の事件についてのアテネ人の要求の横柄なことはトゥキュディデスの指摘するとおりであると言おうとしているかのごとくである。

次に、クレオンがスファクテリアへ遠征することを決議する民会の件について検討する。スファクテリアのスパルタ軍の情勢がアテネ軍勢に不利になったのではないかという懸念がアテネ本国に伝えられると、先にスパルタの使節団を追い返したクレオンの立場が悪くなった(Thuc., 4.27.2-3)。この後のクレオンの一連の行動は、最初は現地視察団の派遣の要請を行ない、その視察団の一員に自分が選ばれると、次に視察団ではなく將軍と増援軍の派遣の要請を行ない、將軍のニキアスがそれを固辞すると、最終的には民衆の声に応じて自身が軍を率いて遠征に出かけ(Thuc., 4.27.3-29.1)、最終的にはスファクテリアの戦いに勝利して本国に凱旋することになる。

ところで、ピュロスの戦況の良くないことがアテネに報じられた時の件についてギリズ<sup>(19)</sup>は、その報告がアテネ民会に動揺をもたらした、「多くの者がデモステネスに対してやかましく反対した。幾人かはクレオンを責めた」と述べる。他方、この件についてトゥキュディデスは、アテネ民衆によるデモステネスへの抗議については言及がないし、また幾人かのアテネ市民がクレオンを責めたとは記述せず、彼に疑念が向けられたと述べるにとどまっている(Thuc., 4.27.3)。また、プルタルコスには、この件のいきさつに言及する中

でアテネ人たちがクレオンに対して怒りを抱いたと述べるもののデモステネスに対する反対については何も述べていない (Plutarchos [以下 Plut. と略す], *Nicias* 7.2)。

さて、ピュロスの戦況報告を受けた後のクレオンの対処の仕方をギリズはどのように述べているのか。ギリズ<sup>(20)</sup>によれば、「その狡猾なデマゴグは、自分の反対行為が主としてスパルタとの有利な和平を妨げてきたので、その知らせを信じないふりをし、そしてその誤報を検証するために折り紙付きの信頼のある男たちをピュロスに派遣することを勧告した」。この箇所ではギリズによってクレオンには「狡猾なデマゴグ」というレッテルが貼られている。また、この件を伝えるトゥキュディデスは、クレオンがピュロスの戦況を伝える報告を信じようとしなかったと述べるものの、その報告の検証のために使節の派遣を勧告したのはクレオンその人ではなくピュロスからの使者たちであったと述べる (Thuc., 4.27.3)。なぜならば、トゥキュディデスによれば、その使者たちは、アテネ人たちに対して自分たちの報告が信じられないならば確認のために現地へ行くことを勧めたからである (Thuc., 4.27.3) し、また現地への視察が行なわれるならば、ピュロスの戦況の不利が確認されてますますクレオンの立場が悪くなるからである (Thuc., 4.27.4)。このようにクレオンが現地への視察団派遣を勧告すれば自身の立場を危うくすることになることは、ギリズ自身も Thuc., 4.27.3 の叙述から知り得ており、後の方の箇所の中で「そのとぼけた奴 [クレオンのこと、引用者注] は自分自身の術策のお先棒になることを恐れた。彼は、もし自分がピュロスに行くならば帰国時にその知らせの真であることを認め、次に目前の恥じに甘んじなければならないか、あるいはその知らせをでっち上げて、次に将来の刑罰にさらされなければならないことに気づいた」と述べている<sup>(21)</sup>。従って、ギリズがなぜ初めの方の箇所でクレオンがいずれ自身が困ることに至る現地視察団の派遣を勧告したと記したのかは理解に苦しむところである。

ところで、ギリズ<sup>(22)</sup>は、その後クレオンが現地視察団の派遣を回避するためにその代わりに将軍が男であるならば数日のうちにスファクテリアを奪取できるし、自分が将軍であるならば最初の攻撃で奪えると公言したし、「これらのいやみな意見は主としてニキアス、現に民会に出席していた将軍たちのひとり、に対して向けられた」と述べる。この箇所のギリズの記述は大筋では Thuc., 4.27.45 中の記述に沿ったものであるといえる。だが、トゥキュディデスの記述がこの箇所以降で淡々と事の成り行きを述べるのに対して、ギリズはその後、「ニキアスの性格」という副題を添えてニキアスの人柄を解説する。すなわち、ニキアスは、「有徳であるが臆病な気質の持ち主であり、並みの能力、そして過度の富を持っていた」人物であり、また「貴族制の熱心な支持者で、クレオンの敵と公言した人であり、彼を自国の中で最悪の敵と見なしていた」とである<sup>(23)</sup>。この箇所でのギリズの狙いは、ニキアスなる人物がそれまではほとんどアテネの政治の面では表舞台に登場しなかったけれども、ここではクレオンの敵対者として重要な役割を演じるので、また、周知のとおり、彼が後にシケリア遠征の敗北を招く将軍としてアテネの政治史の中で肝要な役割を演じることになるので、読者の便を図って彼の人柄の紹介を行なおうとしたことであろう。そのために彼は、トゥキュディデスの淡々と事件を伝える記述を離れて、クレオンの人柄の紹介に話を転じたと思われる。なお、ギリズによる「ニキアスの性格」と題する叙述の内容は、トゥキュディデス『歴史』とプルタルコス『ニキアス伝』によって描かれるニキアスの諸行為などを知れば一般に得ることのできる事柄であり、珍

奇なものではないと思われる。

さて、次にクレオンとニキアスの間で責任の押しつけ合いが始まるのであるが、この件についてのギリーズの叙述<sup>(24)</sup>は、アテネ人たちが「いつもの放縦さを民会に蔓延させながら」クレオンに対してスファクテリア攻撃の企てがそれほど容易であるならば彼に似合いであると大声で叫んだと述べている。この件についてトゥキュディデスは、アテネ人たちがクレオンに対して遠征が容易なのにまだ出航していないと怒り始めた(hypothorybein)と述べる(Thuc., 4.28.1)し、プルタルコスも、アテネ民衆がクレオンに対してなぜ出航しないのかと言った(eipein)と述べる(Plut., *Nicias* 7.3)。ギリーズの叙述と彼にとって史料となるトゥキュディデスおよびプルタルコスの叙述を比較するならば、ギリーズがアテネ民衆の放縦さを明言していることが際立つ。

また、ギリーズ<sup>(25)</sup>は、その件に続いて「ニキアスは立ち上がって、すぐさま彼に指揮権を譲ることを申し出た」と述べる。この言い回しは見たところ Plut., *Nicias* 7.3 のとおりであり、Thuc., 4.28.1 が、ニキアスがクレオンに欲しい分だけ軍勢を率いて企ててみるように言うだけであるのとは表現の仕方が異なっている。従って、かかるニキアスとクレオンの議論の応酬の件は、ギリーズがトゥキュディデスとプルタルコスの両者の叙述を念頭において描いていることが分かるので、彼がこの件を比較的丁寧に描き出そうと試みたと考えられる。

さて、クレオンとニキアスのやり取りのその後は、ニキアスがスファクテリア攻撃の指揮権をクレオンに譲ると申し出たので、クレオンは事態がそのように進むとは思わなかったものであるから攻撃のための出航を拒否しようとした(Thuc., 4.28.2-3)。この件についてギリーズ<sup>(26)</sup>は、大筋ではトゥキュディデスとプルタルコスの叙述と同じであるものの、クレオンが出航を引き受けたくないの「後ろへ退」いたし、「アテネ人たちが、大衆にふさわしい意地の悪いからいでもって、クレオンに間近に押し寄せれば押し寄せるほど、ますます熱心に彼は退いた」と述べており、この点で2人の古代著述家とは言い回しが異なる。そしてギリーズ<sup>(27)</sup>は、クレオンが「ついに彼ら〔アテネ民衆のこと、引用者注〕のしつこさに負けた」が、次に彼が厚かましさを表に出して、「民会の真ん中に進み、『自分はラケダイモン人たちを恐れていない。20日以内で、スパルタ人たちを囚人としてアテネに連れてくるか、あるいは試みて死ぬかを約束する』と宣言した」と叙述する。従って、ギリーズは、クレオンにまずは少しずつ後退させ、次には彼を「民会の真ん中に進」ませているので、彼の厚かましさを強調することと読者のために叙述場面の劇的効果を高めることを試みたとと思われる。さらに、ギリーズ<sup>(28)</sup>は、かかるクレオンの発言に関連して、「この英雄のような言い回しは大衆の間で笑いを誘った」と述べる。アテネ市民たちがクレオンの発言に応じて笑ったことはそれだけで読者のクレオン観を悪くするものであるが、Thuc., 4.28.5 の中には「空疎な大言壮語による笑い」がアテネ人たちの間に起こったと、そして Plut., *Nicias* 7.4 の中には「大笑いした」(gelan mega) という記述がある。従って、この件についてはギリーズがクレオンの評判を落とすためにしっかりとトゥキュディデスおよびプルタルコスの叙述に沿って叙述を進めたと考えられる。

ところで、クレオンによるスファクテリア攻撃の事件についてであるが、この件についてギリーズ<sup>(29)</sup>は、その地でのスパルタ人の捕獲の「出来事が偶然によって急に起こった」と述べる。つまり、それまで戦地を覆っていた森林が偶然の火事によって大部分が

焼失してしまい、ギリーズ<sup>(30)</sup>によれば「この予想されなかった惨事によってスパルタ人たちの兵力と位置が白日の下に晒された」ので、その戦地にいた將軍デモステネスのアテネ軍にとって戦況が有利となったのである。この森林火災がアテネ軍に有利に働いたことは Thuc., 4.29.2-4 & 30.2-3 の中で指摘されている。ギリーズは、かかるトゥキュディデスの記述に基づいて、クレオンの望んでいたスパルタ人の捕獲が「偶然によって急に起こった」と述べたのであろう。だが、Plut., *Nicias* 8.1 は、クレオンがスファクテリアの戦いで「運の良い巡り合わせを享受してデモステネスとともに最もうまく將軍職を務めた」と述べている。他方では、Thuc., 4.29.2 は、当時のクレオンがアテネを出国する前に、森林火災によって有利になったデモステネスのアテネ軍がスパルタ軍にまさに攻撃を仕掛けようとしていた状況をすでに知っていたので、彼を僚将に選んだことを述べる。かかるトゥキュディデスの記述は、クレオンがアテネ民会の席で20日以内にスパルタ人を敗北させて本国に連れ帰ると公言したことがあながち彼の大言壮語ではなかったことを読者に気づかせるものではなかろうか。もしそのように当時の諸事が進んだのであれば、その時のクレオンは、冒険の要素が大であることに変わりがないものの一部は利口な決断を下したことになるはしないか。さすれば、ギリーズの叙述が、前述のプルタルコスによるクレオンへの良い評価はおろか、クレオンが前述の理由からデモステネスを僚将に選んだことを伝えるトゥキュディデスの叙述にも一切言及していないことは、彼が自分の読者に対してクレオンの評判を落とすよう誘導することに腐心して彼の良さを示唆する記述を故意に記そうとしなかったことを示唆するであろう。

なお、スファクテリアの戦いの後、スパルタ人はアテネに和平を申し入れたが、アテネ人はこれを退けた。この件についてギリーズ<sup>(31)</sup>は、アテネ人がスファクテリアの戦いの勝利という幸運によって野心が助長され、クレオンの煽動もあり、スパルタ人使節を「以前よりも横柄に追い返した」ことと、そういうふうに「尊大なデマゴグの意見に従った」ことを述べる。

### 第3節 アリストファネスによって描かれたクレオン

クレオンは、アリストファネスの喜劇作品の中で笑いの種として登場する。主に前425年のレナイア祭で上演された『アカルナイの人々』、前424年のレナイア祭で上演された『騎士』、前422年のレナイア祭で上演された『蜂』がこれにあたる。このアリストファネスによるクレオン攻撃についてギリーズは、題材として『騎士』を取り上げて言及する。初めにギリーズ<sup>(32)</sup>は、アリストファネスの喜劇におけるクレオンについての描写について「クレオンの性格と政治を最も大胆な厳しさをもち、しかも最も辛辣な嘲笑の刃先によって鋭くなった諷刺でもってやり込めた」と総括的な言及をする。

続いて、ギリーズ<sup>(33)</sup>は、スファクテリアの戦いに勝利したクレオンについて「悪名高い臆病者が運の気まぐれによって勇敢で成功を得た指揮官に変身したこと」がアリストファネスの喜劇作家気質に適した話題であるとともに、この「傲慢なデマゴグ」が劇作家の憤りを招いたので、劇作家が「クレオンの無能さと横柄さを、共和国の国事を混乱させる不誠実な身勝手さとともに、非難」したと述べる。そしてギリーズは、その劇作家の『騎士』の中にみられるクレオン攻撃について説明する。彼によるその喜劇についての説明<sup>(34)</sup>

は、その劇のあら筋の紹介というよりも、前半はクレオン、ニキアス、デモステネスのやり取り、後半はニキアスとデモステネスが豚肉屋のアゴラクリトスを担ぎ上げてクレオンと張り合わせることを簡潔に報告するのみである。その報告の特徴として筆者が目にしたことは、ギリズが、その喜劇の中で「アテネの民衆は、気まぐれな老いぼれにたとえて描かれ」ており、その民衆が「軽信さ」を有すると指摘するし<sup>(35)</sup>、さらには別の箇所ですら「老いぼれ、あるいはむしろ彼が代表となっているアテネ人たちが、最後には自分たちの過去の誤りを認める」と述べてアテネ民衆の気まぐれと軽薄さを明らかに指摘している<sup>(36)</sup>ことである。かかるギリズの叙述の仕方は、アリストファネスの喜劇作品を通してクレオンを非難するだけでなく彼によって煽動されたアテネ民衆の愚かさを指摘しようと試みているように思われる。

なお、アリストファネスによるクレオンへの攻撃は、他に「アカルナイの人々」と「蛙」の中でもみられるが、ギリズはこれらの2作品については言及していない。

#### 第4節 アンフィポリスの戦いのクレオン

休戦条約の期限が切れるとまもなく、前422年夏にクレオンはトラキア遠征をアテネ民衆に説いて遠征に出かけた。彼がトラキア遠征に出かけた時の様子はThuc., 5.2.1によって報告されるが、その報告は「さて休戦が終わると、クレオンはアテナイ人を説得して、トラキア方面の諸地方へ向けて、遠征のために出航した」(藤縄謙三訳)<sup>(37)</sup>と述べた後、その軍勢の各種兵力の規模を付言しているだけであり、まさに事件の経過を淡々と伝えるのみである。

他方、ギリズ<sup>(38)</sup>はThuc., 5.2.1の中の記述に該当する個所で、「ブラシダスの積極的な勇猛さが和平の確認を妨げるのに対して、他方でクレオンの故意の卑劣さが戦争の再開、あるいはむしろ継続、を促した。アテネの栄光が彼の演説の永遠の主題であった。彼は、自分の同国人たちにスパルタの不誠実さを罰するように熱心に説き、メンダ〔ママ〕とスキオネの傲慢な離反をそそのかしてさせた。さらにはかつてペロポネソスの海岸で用いて非常に成功した彼自身の技術と勇敢さを使って、マケドニアでの彼らの落ち目の将来を修復するようにと説いた。アテネ人たちはこの乱暴な熱弁家のまことしやかな忠告に耳を傾けたので、彼は、次の春に、マケドニアの海岸に向けて30隻の軍船、1,200人の重装歩兵市民、300頭の騎馬隊、軽装兵の援軍のたくさんの集団とともに出航した」と述べる。彼の記述の特徴を挙げると、(1)前置きとしてのブラシダスとクレオンの対比の記述、(2)クレオンによるトラキア遠征の提案の狙いの詳述、(3)クレオンの提案に対するアテネ民衆の反応についての説明、の3点がある。以下でこの3点について検討する。

(1)前置きとしてのブラシダスとクレオンの対比の記述については、先ず初めにトゥキュディデスの記述の面から検討する。確かにThuc., 5.2.1の中の記述は、前述のとおり、事件の経過を淡々と伝えるのみであるけれども、本来クレオンがトラキア遠征に出かけることになった原因は、前424年晩夏からスパルタ人の将軍ブラシダスがテッサリアに入ってアカントスをデロス同盟から離反させ(Thuc., 4.78-88)、晩秋にアテネ人ハグノンの建設ポリスであるアンフィポリスを攻略し(Thuc., 4.102-106)、冬から翌年の春にかけてアクテ半島とトロネを攻略して(Thuc., 4.109-116)エーゲ海の北岸のアテネ陣営の要所を奪取



したので、戦争の形勢がアテネ側に不利になっただけでなく、その後の前423年夏に一年間の休戦条約が締結されたものの(Thuc., 4.117-119)、ブラシダスの活躍に刺激されたスキオネとメンデが、スキオネに至ってはブラシダスを招き入れて、アテネ側から離反してブラシダス側につき(Thuc., 4.120-123)、他方でアテネがそれを奪還しようとする(Thuc., 4.129-131)など、スパルタとアテネの関係が非常に熱い戦闘状態に陥ったことにある。従って、かかる事態の下でクレオンとブラシダスが激突するアンフィポリスの戦いが起こったのであるから、それに関連してギリズがブラシダスについて「ブラシダスの積極的な勇猛さが和平の確認を妨げる」と評したのは納得できよう。だが、ギリズによる「クレオンの故意の卑劣さが戦争の再開、あるいはむしろ継続、を促した」という叙述は、先のブラシダスとの対比の記述としては彼に対する評価とあまりにも違い過ぎるので、かかるギリズの叙述の違いについて検討する必要があるが生じる。

ところで、ギリズによるブラシダスとクレオンの対比の記述には先行する例が2つある。1つは、トゥキュディデスがアンフィポリスの戦いでブラシダスとクレオンが戦死したことを述べた後に「更にアテナイ人がアンピポリスにおいても敗北し、しかも両陣営で最も頑固に和平に反対していたクレオンとブラシダスが戦死した。ブラシダスが和平に反対したのは、戦争によって幸運と名誉が得られたからであり、クレオンの方は平和になると、悪事が露見し、他人を中傷しても信用されなくなると考えたからであった」(藤縄訳)<sup>(39)</sup>と述べる箇所である(Thuc., 5.16.1)。もう1つは、プルタルコスが「ギリシャ全土の平和に最も反対していたのはクレオンとブラシダスであって、戦争はその一人の邪悪を暴露し、もう一人の勇気を発揮させた。その一人には甚しい不正のきっかけを、もう一人には勲功のきっかけを与えたからである」(河野与一訳、一部新字・現代仮名遣いに訂正)<sup>(40)</sup>と述べる箇所である(Plut., *Nicias* 9.2)。もし近代人がトゥキュディデスの記述の順序に忠実に古代史を描くならば、アンフィポリスの戦いについて記述する前にブラシダスとクレオンの比較をする記述を挿入しないはずであるのに対して、ギリズはそれを行なったが、その理由は、彼が前述の2人の古代史家の記述を知っていたからであろう。ただし、その際にギリズは、トゥキュディデスの記述の順序を無視したわけである。また、トゥキュディデスとプルタルコスの両者がブラシダスの勇敢さを好意的に捉えてクレオンの邪悪さと対比させていることにギリズがならなかったことは明白である。従って、ギリズは、いわばトゥキュディデスとプルタルコスによってお墨付きをもらっているブラシダスとクレオンの対比の記述を自分の読者のためにわざわざアンフィポリスの戦いについての叙述の前置きの箇所に据えたわけである。

次に、(2)クレオンによるトラキア遠征の提案の狙いの詳述について検討する。この件についてのギリズによる叙述は、クレオンがスパルタの不誠実さを罰すること、メンデとスキオネに対してスパルタ人将軍ブラシダス側から離反させること、マケドニアでのアテネの勢力の修復をアテネ民会で提唱したことを指摘する。問題のギリズによる叙述の主旨は、確かにThuc., 5.2.1の中の記述には見当たらない。けれども、Thuc., 4.122.6の中では休戦協定締結直後にスキオネがブラシダス側に寝返った後にアテネ民会がクレオンの提案に従ってスキオネの攻略とスキオネ市民の処刑を決議したことが伝えられている。かかるアテネ市民の決議がブラシダス側によるスキオネの離反に対抗する措置であったことはトゥキュディデスの記述を読めば明白であるので、それゆえにギリズは、クレオンが

スパルタの不誠実さを罰することを民会の場で説いたと憶測したと思われる。さらに、この民会決議の後に実際にアテネ人は軍を派遣してメンデとスキオネを奪還したが、これを指揮したのはクレオンではなくニキアスとニコストラトスであった (Thuc., 4.129.2)。加えて、メンデの奪還に際しては、前述の Thuc., 4.122.6 中のクレオンの提案が災いして影響したのであろうか、クレオンではなくニキアスの指揮下でありながらアテネ軍がメンデの城門から進入して略奪を始めたので、將軍たちがメンデの人々を全滅させないようにやっとのことで抑止したことが Thuc., 4.130.6 の中で記述されている。かかる状況でのメンデとスキオネの奪還後にクレオンがトラキア遠征に出かけたわけであるので、ギリーズは、Thuc., 4.122.6 以降の記述を参照しつつ、前述のように、クレオンがスパルタの不誠実さを罰すること、メンデとスキオネに対してスパルタ人將軍ブラシダス側から離反させること、マケドニアでのアテネの勢力の修復をアテネ民会で提唱したと憶測を交えながら述べたのではなかろうか。

次に、(3) クレオンの提案に対するアテネ民衆の反応についての説明を検討する。ギリーズは、前述のとおり、クレオンの提案に対して「アテネ人たちはこの乱暴な熱弁家のまことしやかな忠告に耳を傾けた」と述べるが、かかるアテネ民衆の反応についてトゥキュディデスは言及していない。従って、このギリーズによる叙述は彼の憶測に過ぎないと思われる。ただし、クレオンの乱暴な熱弁家ぶりは、アリストファネスの諸喜劇作品をその人を笑いの種にする制作意図から論外とするにしても、Thuc., 3.36.6 の中で示唆されているし、また Plut., *Nicias* 8.3 がスファクテリアの勝利後にニキアスがクレオンに勢いを付ける結果になったので「そのためにクレオンはえらい気位と手のつけられない勢を恣にし、国家にいろいろな不幸を招いて自分も少なからずひどい目に会いながら国家に非常な害をおよぼした他、演壇の上の行儀を破って初めて民衆に対する演説で大声を揚げ着物をまくり腿を叩き演説をしながら走り廻る例を開き、政治家の間にその後間もなく国事を悉くひっくり返すような造作なさや程合を無視する癖をつけた」(河野訳、一部新字・現代仮名遣いに訂正)<sup>(41)</sup>と述べているので、ギリーズは叙述の際にこれらの記述をも念頭に入れていた可能性がある。

ところで、クレオンが軍勢を引き連れてトラキアに向かった後についてギリーズ<sup>(42)</sup>は、「メンダ〔ママ〕とトロナ〔ママ〕の降伏は、それらの住民がそれぞれ過剰な残酷さでもって扱われたが、彼〔クレオンのこと、引用者注〕にアンフィポリスを攻撃するように勇気づけた」と述べる。だが、前述のように、メンデへの攻撃ではクレオンではなくニキアスの指揮下のアテネ軍が城門から進入して略奪を始めたので、將軍たちがメンデの人々を全滅させないようにやっとのことで抑止したと Thuc., 4.130.6 が語っている。従って、ニキアスの指揮下のアテネ軍がメンデ人を降伏させた上に彼らを過剰な残酷さでもって扱ったことがアンフィポリス攻撃へ向かうクレオンを勇気づけたというギリーズの記述には少し難がある。他方、トロネの降伏は、クレオンによる攻撃のせいであり、その際にはアテネ軍がスパルタ人將軍のパシテリダスを捕らえるほどの完勝であり、直後にトロネの女子供を奴隷にした (Thuc., 5.3.1-4) ので、ギリーズがこのことを、住民を過剰な残酷さで扱ったと表現することはそれほど的外れではないと思われる。

次に、アンフィポリスの郊外に陣を張ったアテネ軍が援軍の到着を待っていた時、兵士の中でブラシダスに比してのクレオンの無能と臆病に不満を述べる者が出てきた。それに

対して、クレオンは、そもそも自身がマケドニア王ペルディッカス2世とトラキアのオドマントイ人の王ポレスに援軍を要請していた(Thuc., 5.6.2)のであるが、兵士の不満に気づき、さらに「兵士が同じ場所に居座って重苦しい気分になるのは好ましくないと考えたので」(藤縄訳)<sup>(43)</sup>軍を動かすことにした(Thuc., 5.7.2)。他方、ギリズ<sup>(44)</sup>は、クレオンが兵士の不満に気づいた後、「横柄なデマゴグの我慢できない気質が、こういう扇動的な不平不満に耐えるのには適していなかった。彼は急いで自軍をふさわしい場所の前に導いたが、それは前もって城壁の強度、土地の状況、敵の人数または配置を吟味することをせずにであった」と述べる。この箇所ではギリズによってクレオンの我慢の無さが指摘されているが、この件についてはトゥキュディデスは言及していないので、その記述はギリズによる創作である。また、ギリズによればクレオンは「前もって城壁の強度、土地の状況、敵の人数または配置を吟味することをせずに」いたことになっているが、他方ではThuc., 5.7.3-5が、クレオンが敵軍のいるアンフィポリスとその周辺を視察するためにアンフィポリスの中心市を見渡すことのできる山に登りに行くと述べ、実際にそこから視察したことを報告している。確かにトゥキュディデスの記述にあるように(Thuc., 5.7.3)、クレオンの視察の際に彼がブラシダス側が攻撃をしかけるとは予想していなかったことは明白である。けれども、前述のように、ギリズが、クレオンが前もって土地の状況や敵の人数または配置を吟味することをせずにいたと述べることは、曲解とは言えないまでも言い過ぎと見なすことはできまいか。

ところで、クレオンが山に登って視察をしようとしたことがブラシダスの察知するところとなり、アンフィポリスの戦いに至る。この戦いについてトゥキュディデスは、ブラシダスの出撃前の演説を交えて(Thuc., 5.9-10)詳述するが、他方、ギリズ<sup>(45)</sup>は、彼の記述とは異なり簡潔に叙述を試みる。ギリズは、ブラシダスの交戦直前の様子について「その間、ブラシダスは、自分の敵が厚かましいことでよく知られていることを利用する適切な策を講じた。かなりの人数の男がケルデュリオンの木々の多い山の中に隠されたが、そこはアンフィポリスに突き出していた。軍隊の大半が、その都市のいくつかの門の所に、行動に備えて整列させられた。クレアリダスは、その地で指揮をとったが、所定の合図で前へ急いでいくよう命令を出したし、他方、ブラシダスは、自ら、恐れを知らない従者の選りすぐり部隊を指揮し、最初の攻撃の機会をうかがった。その計画は、非常に多くの技でもって考案されたが、同様の巧妙さでもって実行された」と述べる。ギリズによる叙述を読んだ読者は、あたかもブラシダス指揮下の軍勢がケルデュリオンの山林に身を潜め、他方でクレアリダス指揮下の軍勢がアンフィポリスの城壁の門の所で待機し、合図でもって攻撃に出る手はずになっていたと思うであろう。だが、トゥキュディデスの読者は、クレオンの動きを察知したブラシダスがケルデュリオンの山林から下りてアンフィポリスに入城し(Thuc., 5.8.1)、自軍を自身とクレアリダスの指揮下の二手に分け(Thuc., 5.8.4)、出撃前の演説を行ない(Thuc., 5.9-10)、トゥキュディデスは語っていないが再びケルデュリオンの山林に向かい、そこから再び下りてアンフィポリス中心市のアテナ神殿で出撃前の犠牲を捧げた(Thuc., 5.10.2)し、これに対してクレオンがブラシダスの犠牲式や敵軍の配置されていることの知らせを受けて退却を命じたけれども(Thuc., 5.10.2-3)、このクレオン軍の動きを見てブラシダス軍が好機と見てアンフィポリス中心市から出て攻撃を仕掛けたこと(Thuc., 5.10.5-6)を知るであろう。従って、ブラシダス軍は、ギリズが述

べるように身を潜めて出撃の好機を窺ったわけではないし、そのような戦法をブラシダスが計画したわけではない。むしろ、ブラシダスが考案したことは、自軍が人数と質の面で劣勢であるので (Thuc., 5.6.3 & 8.2) <sup>(46)</sup>, Thuc., 5.8.2-4 が語るように、クレオン軍に援軍が到着する前に策略を用いて自軍から急襲しようとするのであった。従って、かかるブラシダス側の様子を伝えるギリーズの記述は、クレオンの評判を落としてブラシダスの勇猛さと賢明さを描くことを狙っていたと考えてよい。

アンフィポリスの戦いの戦闘の様子について、ギリーズ <sup>(47)</sup> は、クレオンのアテネ軍がブラシダス側の「そのような予期せぬ複雑な攻撃の迅速さと正確さに当惑して、大急ぎで逃げ出し、自分の盾を放り出し、自分のむき出しの背中を追手の剣や槍にさらした」し、「6百人のアテネ人たちがクレオンの愚行の犠牲として倒れ」、クレオンが「その敗走時に真先であったけれども、ミュルキノス人の盾兵の手によって捕らわれ」て戦死したと述べる。他方、トゥキュディデスは、アテネ軍が敵の急襲を受けて混乱して敗走したものの、逃げ残った右翼の一部はクレアリダスの攻撃を数回撃退した後には包囲されたので槍を投げて潰走したと報告する (Thuc., 5.10.9-10)。従って、アテネ軍は、全軍がギリーズの記述にあるように「大急ぎで逃げ出し、自分の盾を放り出し、自分のむき出しの背中を追手の剣や槍にさらした」わけではない。また、ギリーズによる「自分のむき出しの背中を追手の剣や槍にさらした」という記述に関連するものを強いて挙げるならば、Thuc., 5.10.4 の中でアテネ軍の右翼がクレオンの指示に従って敵軍に無防備な方を向けたままで撤退したと記述されている箇所がある。だが、これは、アテネ軍が西側のアンフィポリスに在留の敵軍に対して南に位置するエイオンへ向けて撤退したので、槍を持つが盾では防げない右手側を敵軍に向けざるをえなかったことを示唆する。従って、ギリーズの「自分のむき出しの背中を追手の剣や槍にさらした」という記述は、彼の勘違いかあるいは創作と見なすことができよう。

さらに、アンフィポリスの戦いの叙述の最後にギリーズ <sup>(48)</sup> は、クレオンの「死は彼の不運な同国人たちの死者の靈魂をなだめたことであろう」と述べる。かかる表現は、ギリーズによるクレオンへの皮肉を表現したものであろう。そしてこの文言は、「ブラシダスの死と葬礼」と副題の付く段落の最初の文章の中にあり、その段落の中では続いてブラシダスの戦死の様子が、そしてその戦勝の英雄としての葬儀およびアンフィポリス人の彼を讃える諸行為がトゥキュディデスの記述 (Thuc., 5.11.1) に沿う形で、記載されている。ブラシダスの戦死は、トゥキュディデスによれば、クレオンの戦死の直前に受けた負傷によるもので、前線から救い出された (Thuc., 5.10.9) 後にアンフィポリスのポリス内で戦勝の知らせを受けてから死んだ (Thuc., 5.10.11) ことになっている。従って、クレオンの戦死とブラシダスの負傷の記述の仕方がトゥキュディデスとギリーズの間で異なるわけであるが、その理由は、上記のように、ギリーズがブラシダスの件を「ブラシダスの死と葬礼」と副題の付く段落の中で述べることによってクレオンの死とブラシダスの死を明らかに対比させることを試みたせいであろう。

## 結び

これまでギリーズが古代アテネの政治家クレオンを描く仕方を考察してきたが、彼の叙

述の中にはデマゴグであるクレオンを明らかに軽蔑して非難する口調が見て取れると思われる。他方で、ギリーズによるクレオンについての叙述の仕方の面で筆者が注目したいことは次の2点である。(1) 一般にはクレオンに関連する事件について近代の歴史家が叙述する際には一方ではトゥキュディデスの記述にならって彼を描くだけでなく他方ではアリストファネスの諸喜劇の中で描かれたクレオンのデマゴグぶりが追記されると予想されるが、アリストファネスが3作品の中でクレオンに言及しているにもかかわらずギリーズがそれらのうちの『騎士』のみしか挙げていないので、ギリーズによるクレオンの描写の中では彼のデマゴグぶりがそれほど描写されていないように見受けられる。(2) ギリーズがクレオンについての叙述を通じてアテネ民衆の放縦さや愚かさにとびとび言及している。

(1) の点に関連して、ギリーズは『騎士』の中のクレオン描写を説明する中で、アゴラクリトスとクレオンとが張り合う場面を「最低のおどけ、しかも常に滑稽でしばしば下品なそれ、のスタイルで続けられている」と述べるし、またギリーズの書がもともとは国王ジョージ3世に献呈されるものであった<sup>(49)</sup> ことから、彼が執筆に際してアリストファネスの下品な喜劇作品から得た知見を進んで盛り込もうとはしなかった可能性がある。

(2) の点については、上記ですでに述べている諸点であるが、例えば、彼が、ミュティレネ人処遇問題の件についての叙述の中ではアテネ民衆にはクレオンのデマゴグぶりが「大胆で男らしい率直さを持つ者として好意的に映った」と述べたり、ピュロスの戦況の良くないことが報告された時にアテネ民衆がデモステネスに対して抗議したとトゥキュディデスが言及していないことを述べたり、スファクテリア遠征直前のクレオンとニキアスとの民会でのやり取りの叙述の中では彼がアテネ民衆の放縦さを明言している点が際立っていたり、彼がアリストファネス『騎士』の喜劇作品にみられるクレオンを描きながら彼に煽動されたアテネ民衆の愚かさを指摘したり、クレオンのトラキア遠征に関する提案に対するアテネ民衆の反応についてわざわざ言及したりしている。このようにギリーズがクレオンを描く際にアテネ民衆の放縦さや愚かさにとびとび言及していることは、彼が序文の中でジョージ3世に宛てて書いた献上の辞を思い起こさせる。なぜならば、その箇所ではギリーズ<sup>(50)</sup> は、「ギリシアの歴史は民主制の危険な騒乱を暴露し、僭主たち〔民衆のこと、引用者注〕の専制主義を非難する。あらゆる形態の共和制的政策に本来備わっている治療不能の諸悪を叙述することによって」イギリスの王制によってうまく統治された安定した政治とそれから得られる自由が明らかになることを語っているからである。ギリーズによるクレオン描写の仕方は、かかる「治療不能の諸悪」を有する民主制を描きたい彼の執筆意図に沿ったものであったと考えられる。

## 註

(1) G. Smith, L. Stephen and S. Lee eds., *Dictionary of National Biography* 7 (Oxford, 1921-1922), p. 1247 s.v. GILLIES, JOHN.

(2) *Ibid.*

(3) J.T. Roberts, *Athens on Trial: the Antidemocratic Tradition in Western Thought*

(Princeton, 1994), p. 200.

(4) *Ibid.*

(5) Smith et al., *op. cit.*, p. 1247.

(6) *Ibid.*

(7) 年代については、トゥーキュディデース（久保正彰訳）『戦史 中』（岩波書店、1966 / 1975年）366-368頁を参照せよ。

(8) J. Gillies, *The History of Ancient Greece, its Colonies, and Conquests* [以下 *H.A.G.* と略す] 2 (London, 1820), p. 244.

(9) ギリズはミュティレネ (Mytilênê) のポリス名を「ミテュレネ」(Mitylené) と記すが、その別称はしばしば誤用されたことに由来するらしく、ミュティレネが正式の名称である。

(10) Gillies, *H.A.G.* 2, p. 244.

(11) *Ibid.*, p. 244-245.

(12) *Ibid.*, p. 246.

(13) *Ibid.*, p. 246 & 249.

(14) *Ibid.*, p. 249.

(15) *Ibid.*, p. 280.

(16) *Ibid.*, p. 280.

(17) *Ibid.*, p. 280.

(18) *Ibid.*, p. 280 n. 11.

(19) *Ibid.*, p. 281.

(20) *Ibid.*, p. 281.

(21) *Ibid.*, p. 281-282.

(22) *Ibid.*, p. 282.

(23) *Ibid.*, p. 282.

(24) *Ibid.*, p. 282.

(25) *Ibid.*, p. 282.

(26) *Ibid.*, p. 282-283.

(27) *Ibid.*, p. 283.

(28) *Ibid.*, p. 283.

(29) *Ibid.*, p. 283.

(30) *Ibid.*, p. 283.

(31) *Ibid.*, p. 286. なお、アテネ人がスパルタ人使節を追い返したことは、Thuc., 4.41.3の中で記されているが、ギリズは、注の中で「Aristoph. Equit. v. 794」、すなわちアリストファネス『騎士』の中でクレオンがスパルタ人使節を追い払ったことを示唆する箇所を挙げる。

(32) Gillies, *H.A.G.* 2, p. 286.

(33) *Ibid.*, p. 286-287.

(34) *Ibid.*, p. 287-289.

(35) *Ibid.*, p. 287.

- (36) *Ibid.*, p. 288-289.
- (37) 藤縄謙三訳『トゥキュディデス 歴史 1』（京都大学学術出版会，2000年）486頁。
- (38) Gillies, *H.A.G.* 2, p. 301.
- (39) 藤縄訳，前掲書，511頁。
- (40) 河野与一訳『プルターク英雄伝（7）』（岩波書店，1955 / 1976年）116頁。
- (41) 河野訳，前掲書，115頁。
- (42) Gillies, *H.A.G.* 2, p. 302.
- (43) 藤縄訳，前掲書，502頁。
- (44) Gillies, *H.A.G.* 2, p. 302.
- (45) *Ibid.*, p. 302-303.
- (46) Thuc., 5.8.2の中でクレオン軍とブランダス軍が人数の面で互角であったと記述されているが，これは Thuc., 5.6.3の中の記述と矛盾することが知られている（小西晴雄訳『トゥーキュディデース～世界古典文学全集 11』〔筑摩書房，1971 / 1986年〕175頁，注3）。
- (47) Gillies, *H.A.G.* 2, p. 303.
- (48) *Ibid.*, p. 303.
- (49) J. Gillies, *H.A.G.* 1 (London, 1820), p. iii-iv.
- (50) *Ibid.*, p. iii.

## 〔付記〕

本稿は，平成 12 - 13 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 「古代アテネ民主制は衆愚政治であったのか——古代と近代からの考察」（課題番号：12610407）の研究成果の一部である。